特定非営利活動法人
宮入
慶之助
記念館

宮入慶之助記念館だより 第21号

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2014（平成26）年　10月15日発行

巻頭言「西アフリカの住血吸虫病を野口英世は観たのか？」　理事　太田　伸生

私はこの15年来、西アフリカのガーナで寄生虫対策や寄生虫病に関する共同研究プロジェクトに関わってきました。西アフリカでガーナはいろんな点で優等生です。サハラ以南のアフリカでは初めて独立を果たしたということは国民の誇りであり、サッカーファンならご存知の Black Stars という強いチームもまた然り。それよりも政治の安定性は社会の成熟度の指標であり、直近の大統領選挙では全くの僅差でしたが、その決定を国民は受入れています。他のアフリカ国家であれば「選挙は無効だ」として内乱が起こっても不思議ではなかったでしょう。

そのガーナでも住血吸虫病の流行は大問題です。この国の西部には大河・ボルタ河がギニア湾に注いでおり、下流域には住血吸虫病の流行地が広がっています。もっとも、アフリカにはミヤイリガイはいないため日本住血吸虫ではありませんが、別種のビルハルツ住血吸虫という虫が寄生して、尿に血液が混じる（血尿）症状を起こします。ビルハルツ住血吸虫の感染では膀胱が主病変であるからです。膀胱がんの原因として問題視されています。

尿に血液が混じると、大概の人は何かおかしいと気づきます。日本住血吸虫病では末期に肝臓がやられて腹水がたまるようになって気づかれるのと違って、ビルハルツ住血吸虫感染では早期から感染のサインが誰にでもわかるのです。「何かおかしい」と気づいたとき、人間はどのように行動するのでしょうか。ガーナではありませんが、アフリカの流行地では、男児が血尿を示すようになることが成人の証しとするケースがあると聞きました。そのような地域では住血吸虫病を撲滅してはならないのです。病気をなくすと血尿がなくなり、あげくにその地域には成人の資格を持つ青年がいないことになるからです。まさに寄生虫病は文化と共にあることの典型例です。

さて、ガーナと言えば日本人なら野口英世終焉の地であることを誰もが知っています。首都アクラ市内には現在でも野口が使った実験室が残っていて、ガーナを訪れる日本人の観光ポイントです。野口が活躍した明治後半から昭和初期にかけては日本の医学研究史上の著名人の活躍と時期を同じとしますので、面白い人間関係を見ることがあります。山梨で日本住血吸虫症対策に尽力した医師・三神三郎は東京の医学予備門、済世学舎で野口と同期で、医業開業試験も同時に合格しました。その後、三神は故郷に戻って住民を苦しめる風土病の制圧に力を尽くしましたが、野口はアメリカに渡って世界の檜舞台で活躍する方向を選んだのです。もしも野口の故郷が山梨であったら、わが国の住血吸虫病対策が大きく違っていただろうと思います。

宮入慶之助と野口英世との関係について筆者は不明にして承知しない所ですが、1924 年に藤浪 鑑も一緒に渡米してロックフェラー研究所を訪問しています。当時ロックフェラー研究所のスター研究者であった野口と会わなかったとは想像しがたいでしょう。当記念館ホームページでも野口が宮入慶之助の著書を大切にしていたとありますからそれなりの交流はあったのでしょうが、ご存知の会員がいらっしゃればご教示いただきたい所です。

野口はガーナで住血吸虫を観たのでしょうか？結論から言えば No です。わずか半年間のガーナ滞在中に野口は実験用の

サル 700 頭あまりを解剖したと記録にありますから、とてもボルタ河河口地域まで足を伸ばせたはずもありません。野口の足跡を辿ると、住血吸虫病との接触の可能性があったのはガーナだけですから、あの猛烈研究者であった野口が住血吸虫病についても興味を持っていたら、この病気の研究がどのように進展したのか興味があります。ガーナで野口が血眼になって中間宿主貝の解剖に没頭する図も容易に想像できますが、宮入慶之助がガーナに赴いていたらどのような研究をしたのか考えてみるのも少しおもしろい。20 世紀初頭の医学研究の激動期、それぞれがそれぞれの地で素晴らしい研究成果をあげました。歴史は振り返れば必然で動くものなのだと感じています。

退任ごあいさつ

会員　　澁川　眞喜男

私は今年 6 月の総会において監事を退任いたしました。

これまで理事長をはじめ役員や会員の方々から多くのご指導ご支援をいただき、誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

平成 19 年に当館を NPO 法人化することになり、そのための準備活動にはじまり平成 20 年に認証を取得し監事に就任いたしました。当初は私的な施設としてスタートした当館を法人化して社会的な存在として認められたものとし、より充実した社会貢献を目指してお手伝いしてきました。

昨年は中間宿主カイ発見 100 周年のイベントを展開し、宮入慶之助の業績と日本住血吸虫症撲滅に至る歴史を多くの方々に知ってもらうことができました。

在任中で一番思い出深いのは「宮入先生の偉業をたどる旅」であります。

平成22年10月に宮入先生ゆかりの北九州・筑後川流域の各所を訪れ、中間宿主カイ発見に至った現地を実体験しようとするものでした。長年にわたり地域住民の生命と暮らしに重大な脅威であった日本住血吸虫病に対し宮入先生がその解決にいかに力を尽くされたかを直接感じ取ることのできた有意義な旅でした。

今後への希望は、認定 NPO の資格取得についてであります。NPO 法人への寄付金を課税控除の対象とする法律が施行されてから 10 年以上が経過しています。認定を得る条件が緩和される方向であることは間違いないと思います。たとえ少額でも寄付していただく方々を大事にして、有利な制度が適用できる法人になるようご努力をお願いしたいと思います。

今後は会員として引き続き協力させていただきたいと思います。

皆々様のご健勝と記念館のますますのご発展をお祈りいたします。

日本住血吸虫病対策についての調査

会員　　長谷川　光子

はじめまして。吉備国際大学修士課程（通信制）連合国際協力研究科２年の長谷川光子と申します。よろしくお願い致します。私は麻布大学で内田明彦先生と川上泰先生から寄生虫学を学び、卒業論文は昭和大学の白倉哲郎先生からご指導いただきシャーガス病の感染状況の調査を行いました。現在は会社員をしながら、住血吸虫症対策をテーマに修士論文に取り組んでおります。

今年１月に初めて記念館を訪問させていただいた際は館長にあたたかく迎えていただき、長時間資料を拝見させていただき、更に今回はこのような機会を頂戴し、感謝に堪えません。

研究は開発途上国における住血吸虫症に有効な対策を、元有病地である九州・筑後川流域の事例から検証することを目的とし、先行研究・文献のレビューに加え、聞き取り調査を行いました。文献レビューは記念館の貴重な資料を活用させていただいております。聞き取り調査は鳥栖市と久留米市で 60～80 代の 13 名から、子どもの頃の生活環境や農業、検査と治療、また衛生教育等のお話を聞かせていただきました。

予防のための教育は文献に記録が見つからず、聞き取り調査でもほとんど記憶がないとのことでしたが、一方で次のような声もありました。「久留米大学の先生がきてから、ここで（ミヤイリガイを）潰してですね、顕微鏡で見よったんですね。ものすごいグロテスクな格好しとうですもんね。こんなのが体の中におるとかって皆で話していましたですね」（鳥栖市、79 才男性）

地域の研究者が小学生に実験を通して教育していたという事実に驚いたのと同時に、対策当時を知る人々の高齢化が進む中、文献に残っていない当事者の記憶を今、聞くことができる間に、オーラル・ヒストリーとして記録していくことの大切さを実感しました。

現在、調査結果をまとめておりますが、積極的な住民参加、間接的な効果、包括的アプローチなど、日本の戦略の一部は現在の開発途上国での政策の一助となりうるのではないかと感じております。また海外との交流がますます盛んになってきている状況を考慮しますと、住血吸虫症が日本で再興感染症となる可能性も無いとは言えないと思っております。そのような意味でも、記憶を風化させないよう今後も記録し、残していきたいと考えております。

まだまだ住血吸虫の勉強を始めたばかりの未熟者ですが、記念館会員の先生方、先輩方よりご指導を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

祖父慶之助の若き日の写真

会員　　宮入　聰一郎

昨年 11 月の九州大学医学部での「日本住血吸虫中間宿主発見百周年展」開催に際し、行事を盛り上げる一助にと、私の福岡在住当時の同期生や大学時代の所属クラブの先輩・後輩にイベントへの参加案内をいたしました。その中で思いがけない事実が判明いたしましたのでご報告いたします。

かつて記念館だより 11 号（平成 11 年 9 月）に祖父宮入慶之助の名前を付けてもらった大学時代のゼミ担当教授中澤慶之助の思い出を掲載させていただきました。恩師中澤先生は故人となられましたが、末娘である中澤英子さんがゆかりの写真を保存されていることがわかりました。それは、英子さんの祖父（中澤先生の父上）中澤信四郎氏と慶之助の二人が写っている写真（今回掲載）です。右側が信四郎氏、左側が慶之助で、東京帝大医学部の同期生として懇意にしていたことから、写真が中澤家に残されていたものと思われます。

信四郎氏は 42 歳で早逝されたそうで、その家系は播磨藩代々の御典医で子息にも医者がおられるそうです。写真が見つかるまでの経緯は省略しますが、中澤英子さんのご厚意により写真のコピーを寄贈いただくことになりました。写真は若き慶之助が内務省検疫局事務官として勤務していた 31 から 32 歳のころと推定されます。

祖父の写真は九州帝大教授時代のものがほとんどで、モダンな雰囲気の 30 歳代の写真に出会えたことには、全く驚きの一言でありました。

これもひとえに関係された皆様の多大なご尽力のもとに 100 周年記念行事が実現したことによるエピソードであると感謝している次第です。

フリードリッヒ・レョフレル先生（肉筆原稿）

研究員　　宮入　建三

宮入慶之助は、日本伝染病学会雑誌8～9巻（1934　昭和9）の談叢欄に「フリードリッヒ・レョフレル先生」と題して10回に及ぶ連載をおこない、留学時代の様子や欧州に於ける医学の動向、医学研究への姿勢などを書いています。

この連載の肉筆原稿は、昨年逝去された宮入慶之助の孫・村山定男氏が所持しておられました。このほど、故村山氏の親戚代表 丹野廉三氏のご厚意により、当館に寄贈されました。村山定男氏のお父様が、元東京市立駒込病院長の村山達三氏であることなどが関係してこの原稿が定男氏のもとに保存されていたのかもしれません。

原稿は、万年筆を使用し紺色のインクで書かれ、時代を偲ばせます。

フリードリッヒ・レョフレルは、フリードリッヒ・アウグスト・ヨハネス・レフラーと言われるドイツの細菌学者で、ジフテリア菌の発見者として有名です。

1890（明治 23）年秋に帝国大学医科を卒業した慶之助は、衛生学教室の助手、京都府医学校の教諭、第一高等学校教授を経て衛生局防疫課長、中央衛生会委員など内務省の役人として勤務していましたが、文部省からの突然の命令で、ドイツに留学することになりました。期間は、1902（明治35）年4月25日より1904（明治37）年8月21日までで、目的は衛生学を学ぶためでした。

この伝染病学会誌の連載はドイツ留学から約30年経っていますが留学中における様々なことが書かれています。

ドイツの留学先については、連載9回目の文中で、「（略）文部省の留学生となった。初めブレスラウに行きフリュッゲに師事せんとして断られ、狐懐粛々グライフスワルドに向う、（略）　車窓の外秋天陰り小都の客舎蟲聲哀し、心細き極みであった。（レョフレル）先生に謁してフリュッゲに断はられたよしを陳べ、先生に（師事したいと）頼み入った。先生は気の毒に思われたらしき色見え、就きて学ぶことを許された。」（カッコ内は筆者）

何ヶ月もの船旅では、嵐に巻き込まれるなどの苦難の末、ようやくたどりついたドイツで、目的としていたフリュッゲのもとへの入門・留学を断られるという衝撃の結果に途方に暮れたことでしょう。

別の箇所で、「師レョフレルは、鼻疽や、豚丹毒や、ジフテリヤの病原菌発見者として（略）」「レョフレル先生は、ガフキイの代わりとしてベルリンへ迎えられ、コッホ研究所の長となられた。」という記載があります。

ドイツ留学中の研究内容については、「教室に入って、まず手がけたことは、先生の鞭毛染色のお手伝いだった。」「師レョフレルの指導のもとに行なった仕事は、①グラム染色法、②「チフス」菌培養法だった。」この二つの仕事については、まとめたが、論文にはしなかった。「師レョフレルが、まとめてくれて、グライフスワルド医学会で発表してくれた。」等と書いています。

様々な経過を経て、慶之助はドイツ留学を果たすことが出来ました。ドイツの留学生活で得たものは、医学に限らず、全てにわたり母国日本とは較べようもないほどすばらしい経験の連続で、ドイツ医学に心酔しました。師レョフレルも人格・識見とも申し分なく、生涯の師と仰ぐことになりました。

記念館活動記録(平成26年6月以降)

□6月7日、ホテルJALシティ長野会議室にて平成26年度通常総会が開催され、会員28名（委任状11名）が出席のもと、平成25年度の事業報告、同収支決算、26年度事業計画、26年度役員が承認・可決されました。平成25年度の収支は、前期繰越805、収入1,548、支出1,467、次期繰越 887（数字単位はいずれも千円）でした。会員状況は、正会員32名、賛助会員56名です。役員は、小山　義

夫氏が新任理事に、澁川　眞喜男監事が退任、柳澤　紘氏が新任監事にそれぞれ選出・承認されました。議事終了後、多田　功理事による「日本における寄生虫防圧;その社会的特質」と題する講演がありました。

総会で選出された今年度の役員はつぎのとおりです。

理事長　　宮入　源太郎
理　事　　多田　功
理　事　　太田　伸生
理　事　　小山　義男
監　事　　川野　登
監　事　　柳澤　紘

□9 月 21 日付信濃毎日新聞の信州ワイド欄で「福岡の信州　九州大の宮入通り吸虫症解明　松代出身研究者ちなみ」という特集記事が掲載されました。この記事については、当館への取材・資料貸出、福岡・佐賀地区への現地取材、多田名誉館長へのインタビューなどが行われました。

□9 月 26 日付朝日新聞山梨欄で「遠ざかる記憶　住血吸虫はいま ③ 治療・研究の場どう残す　診察室や博物館、連携求める声」という特集記事が掲載され、この中で当館の紹介がされました。この記事については 6 月下旬に当館への取材が行われました。

同紙山梨欄では、「遠ざかる記憶　住血吸虫はいま」というタイトルの 5 回の連載記事が計画され、今回は 3 回目の記事として掲載されました。

会員入会へのお礼

（順不同、敬称略）

(会員)　長谷川　光子

ご支援へのお礼

（順不同、敬称略）

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

寄　金　　多田　功、川野　登、澁川　眞喜男、宮入　建三、福田　初江
寄　贈　　宮尾　芳雄
資料提供　大島　芳正　長谷川　光子

宮入慶之助記念館販売品のご案内

「ミヤイリガイ発見百周年」記念グッズを販売しています。

ミヤイリガイの入ったストラップ

日本住血吸虫を図案化したTシャツ

○記念ストラップ　　1,050 円（送料共）
（ミヤイリガイ標本が封入されています）
○Tシャツ（カラーは、白、黒。サイズは、L、M。）　　1,680 円（送料共）
（日本住血吸虫をデザインしています）
ご注文は、事務局（TEL/FAX 026-293-3828）まで。
郵便振替口座番号　００５９０－６－８２１２２　加入者名　宮入慶之助記念館

新規会員募集

私たちは、宮入慶之助の業績を後世に伝えると共に、ミヤイリガイを駆除し日本国内を日本住血吸虫症から安全な状態に導いた先人の努力の歴史を末永く伝えることを目標に、記念館の維持・運営、資料の保存・展示・説明・調査・収集、機関紙の発行、展示会・講演会の開催などの活動をしています。

このような活動に参加またはご支援いただける会員を募集しています。

会員種別は以下の通りです。

正会員　当館の活動に参加またはご支援いただける方　　年会費　3.000円

賛助会員　当館の活動に財政的にご支援いただける方　　年間3.000円以上のご支援

ご希望の方は、電話・手紙・FAX・Eメール（アドレス gmiyairi@triton.ocn.ne.jp）いずれかの方法で事務局までご連絡ください。入会申込書と振り込み用紙をお送りします。

編集後記

○6月の総会で監事を退任された澁川会員にごあいさつをいただきました。
引き続き会員として、ご支援いただきますようお願いいたします。

○1月に来館いただき、その後も北九州の流行地へ取材活動をされるなど熱心な研究を続けておられる長谷川会員にご執筆いただきました。

○昨年の九州大学医学部での記念展が縁で、宮入聰一郎会員が若き日の祖父慶之助の写真を入手され寄贈くださったので、経緯につきご執筆いただきました。
当館所蔵の彼の写真は、東京大学予備門時代の写真が最古で、その他は30歳台後半からのものでした。それだけに今回の写真は貴重と考えています。
若々しい彼の姿に驚きました。

○丹野廉三氏から寄贈いただいた慶之助の直筆原稿は、当時の印刷・出版事情を偲ばせると同時に、改めて彼のドイツ留学時代をより詳しく知る必要性を感じました。
引き続き研究をすすめて彼の留学時代とその前後をより詳しく記録したいものです。

○最近、世界遺産白川郷を見学する機会がありました。現代の我々からみるとはるかに耐久性に劣る木材を中心に釘を使わず、耐寒、耐震、防火、雪対策などに知恵を結集した建築構造と定期的に大改修を続けて何百年も維持・継承してきた集落のシステムに感嘆しました。文化財保護の専門家の世界では、構造物は補修が済むと同時に劣化が始まることを認識しなければならないと言われているようです。
来年2015年は慶之助の生誕150周年の年です。当記念館も建物・収蔵物そして情報の劣化が進んでいることを認識して今後を考えなければと思うこのごろです。

○熱帯の感染症とされてきたデング熱が約70年ぶりに日本国内に感染したと報道され、大騒ぎになりました。日本住血吸虫症の場合はどんなことになるのでしょうか。

宮入慶之助記念館だより　第21号
発行者
特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
編集者　宮入源太郎
〒388-8018　長野市篠ノ井西寺尾2322
Tel&Fax (事務局)026(293)3828
(記念館)026(293)4028
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ　http:www5.ocn.ne.jp/~miyairi/
発行日　2014(平成26)年　10月15日